



満洲浪漫

神戸

(9月30日～10月6日)

- ①「クレ・ド・ポーボーテ」(宝島社・1500)
- ②安藤明「ドイツ菓子大全」(柴田書店・4935)
- ③「映画『神秘の法』完全ガイド」(幸福の科学出版・840)
- ④渡辺和子「置かれた場所で咲きなさい」(幻冬舎・1000)
- ④佐藤次男、佐々木迪之「はじめての電磁気と電気回路」(日刊工業新聞社・2415)
- ⑥大川隆法「朝日新聞はまだ反日か」(幸福の科学出版・1470)
- ⑦「JOJO menon」(集英社・1200)
- ⑧「LAVENHAM 2012～13 秋冬②」(宝島社・1500)
- ⑧大川隆法「天才作家三島由紀夫の描く死後の世界」(幸福の科学出版・1470)
- ⑧大川隆法「従軍慰安婦問題と南京大虐殺は本当か？」(幸福の科学出版・1470) (紀伊国屋書店神戸店調べ、単位円)



戦前に26歳で旧満州(中国東北)へ渡り、白系ロシア人作家ハイコフの小説「偉大なる王」を翻訳、日本中の話題をさらった男がいた。彼の名は長谷川瀧。満洲映画協会の理事長、甘粕正彦にも重用されたが、戦後は職を転々とし、世間から忘れられた存在となっていた。

そんな長谷川の生涯に光を当てたのがノンフィクション作家の大島幹雄さんだ。遺族から渡された日記代わりの自筆ノートを手掛かりに、評伝「満洲浪漫」を執筆し

大島 幹雄さん

おおしま・みぎお 1953年宮城県石巻市生まれ。早稲田大非常勤講師。横浜市在住。

「何度も挫折しかけながら、最後まで精神の自由を忘れなかった彼の生きざまを多くの人に知ってほしい」と語る。

きっかけは、戦後の伝説的興行師、神影の評伝「虚業成れり」(2004年刊)の取材だった。神の下で一時期働いていた長谷川のエピソードを聞くために次男宅を訪れた帰り際、「実は父が残した日記があります」と告げられた。

それは長谷川が1973年に67歳で亡くなるまで約20年間、書き

精神の自由貫いた生涯



「ノートには甘粕正彦の自決の場に立ち会った時の秘話も書かれていた」と語る大島幹雄さん=東京都渋谷区

題材は、江戸時代に石巻から江戸へ米を運ぶ途中、ロシアに漂着し、うち4人が日本人として初めて世界一周した「若宮丸漂流民」の物語だ。

「いつも僕は苦難の果てにさすらいながら前へ進む人たちが好きらしい。震災後を生きる人たちが、長谷川や若宮丸漂流民の物語に希望を見いだしてくれたらうれし

りである。ストーリーはリアリズムあふれる大阪の街を舞台にテンポよく進み、最後は少し切ない、でも大爆笑してしまうオチがつく。

とにかく、主人公のオツサンたちのキャラクターが立っており、ストーリー展開もリアスミカルで、テンポよく読み進むことができ、作者は大阪の私立高校

著者に聞く

時代に乗り損ねた大人へ

主人公は42〜43歳の4人組。大阪西成に生まれ育った中学の同級生である。時代の流れにうまく乗り損ね、「ちゃんとした大人」になり損ねた彼らが、「二発いてこましたれ!」のノリで詐欺を働く「中年の青

注目冊

フォー

堀田純司著 (講談社・1680円)



の議員を引っ掛けるために再び集まるのだった。「詐欺の手口は社会の鏡であり、詐欺師は人の欲望の司祭なんや」と聞き直り、「奈良の山奥で発見されたレアアース」を文に議員から金をだまし取ろうと画策する。作者は大阪の私立高校